平成２８年度

小金井平和の日記念行事

「平和作文集」

小金井市

は　じ　め　に

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を３年ごとに行っています。昭和２８年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年１２月２０日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和３５年１０月３日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和５７年４月１日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の精神からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和５４年３月２０日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和市長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成２６年１２月１８日に戦後７０年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から７編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていただければ幸いです。

平成２９年３月

企画財政部広報秘書課

目　次

【入賞作文】

中学生の部　大賞

「責任」

武川　明日香（東京学芸大学附属小金井中学校　３年生）・・・・・・・・・１

中学生の部　優秀賞

「私がつなぐ平和のバトン」

小林　由季（小金井市立緑中学校　３年生）・・・・・・・・・・・・・・・３

小学生の部　大賞

「今の私にできること」

藤山　彩乃（東京学芸大学附属小金井小学校　６年生）・・・・・・・・・・５

小学生の部　優秀賞

「わたしのへいわ」

金丸　桃子（小金井市立緑小学校　１年生）・・・・・・・・・・・・・・・７

【佳　作】

「私達がつくる平和」

望月　清恵（小金井市立東中学校　１年生）・・・・・・・・・・・・・・・９

「戦争について思うこと」

箱井　真理（小金井市立緑小学校　５年生）・・・・・・・・・・・・・・・１１

「未来につなぐ道しるべ」

工藤　友奈（小金井市立前原小学校　５年生）・・・・・・・・・・・・・・１３

大　賞

「責任」

武川　明日香（東京学芸大学附属小金井中学校　３年生）

昨年の夏、市内のデイサービスでご高齢の方々から戦時中の体験談を聞かせていただく機会があった。「八ヶ岳のふもとから見る東京の空が真っ赤だった。」「毎晩、空襲があって眠れなかった。」「目の前で朝鮮の人が殺されそうになっていた。」など、伺った話はどれも、今の私には想像することもできないくらい悲惨で恐ろしいものだった。そのとき私はこの話を忘れないように伝えていこうと思った。

しかし後日、そのときに話をして下さった方のうち、一人の方が、すっかり気分がふさいで落ち込まれてしまったと聞いた。戦時中のことをいろいろと思い出してしまったからだそうだ。私は、このことを知ったとき、「あぁ、なんて悪いことをしてしまったのだろう。聞いて悪かったな。」と、とっさに思った。聞かなければよかったと思い、母に相談してみた。すると「そうだね。だからこそ、話を聞かせていただいたことに感謝をして、聞いたことに責任を持つことが、大切なのでは？」とアドバイスをしてくれた。

「責任」、この言葉が私の胸に深く突き刺さった。私はなんて重い「責任」を背負ってしまったのだろう。私は、この「責任」を果たすために何をしたらいいのか、私には何ができるのか、一生懸命に考えた。

中学生である私にできることは限られている。伝えるといっても、実際に私がどれだけの人に伝えることができるだろう。

私にできること、それはやはり伺ったお話を忘れないでいることなのではないか。それに加えて、平和について考え続けることではないか。

今、日本は平和だが、世界では争いが絶えず、戦争のニュースを度々耳にする。正直なところ、私には難しくてよく分からないことも多い。しかし分からないからといって、それらを他人事としてとらえず、考え、分からないことは周りの大人に質問するなどして、少しでも理解できるように努めていきたい。

このように、世の中で起こっていることに無関心でなく、意識を持つこと

が大切だと思う。そうすれば、私が大人になったときに、伺った貴重な話を子供たちに忘れずに伝えることができ、平和を守っていくための正しい選択ができるのではないだろうか。こうやって、平和を守っていく努力をすることで「責任」を果たすことができるのかもしれない。

優秀賞

私がつなぐ平和のバトン

小林　由季（小金井市立緑中学校　３年生）

「戦争は、決して忘れてはいけないと思います。」
戦争について、皆は必ずこう答える。しかし、戦争を良く知らない私たちが、簡単にこう言っていいのだろうか。

昨年の春、私をとてもかわいがってくれた祖父が亡くなった。昭和二年生まれ、八十九年の生涯だった。ちょうど、小学生から高校生の頃に戦争を体験した。兄が中国で戦死、弟が学徒勤労奉仕中に亡くなり、家族二人を失くしている。祖父は、いつも八月にはあまりテレビを見なかった。戦争のことを伝える番組が多く、思い出したくないと言っていた。私が何気なくテレビをつけると、ニュースでは、
「あの日を忘れない」
「あの日から七十年」
と、たくさんの言葉が流れてくる。それを祖父は、
「思い出したくないものだってある。」
そう言って、ぷつりとテレビの電源を切った。私は、その時の祖父の悲しそうな顔や、かすれた声を今でも忘れることができない。戦争は、こんなにも人に深い傷を残すのかと、言葉が出なかった。

祖父は、毎年靖国神社へ参拝していて、私も小さい頃からよく連れて行かれた。靖国神社境内に併設されている遊就館という資料館には、戦争で亡くなられた、たくさんの人の写真、遺書や遺品等が展示されている。若い人たちが皆、お国や家族、故郷のため、と命をなげだした事実は、とても重い。まだまだやりたいこと、やり残したこと、希望あふれる未来がたくさんあったはずだ。展示物を見ていると、そういった思いで胸がいっぱいになる。小さい頃にはわからなかったけれど、歴史を勉強した今なら、いろいろと理解出来るようになった。祖父は、子供を二人失くした母親の姿を見ていたから、
「親より先に子が死ぬことはあってはならない。」
と、私に教えてくれた。家族を失った喪失感はいつまでも癒えることはない

のだと。

私は、祖父と同年代の作家・藤沢周平を父にもつ遠藤展子さんのエッセイを読んだことがあるが、藤沢周平は生涯、「普通が一番」と言い続けていたそうだ。平和だからこそ、普通の暮らしが出来て、当たり前のように毎日を送ることができる。戦争中は衣・食・住すべてが失われた。祖父から、鍋・釜の供出だけでなくかわいがっていた犬も立派ないい毛並みをしていると軍に連れていかれたと聞いたことがあった。私は、祖父が、当たり前のように食卓をみんなで囲んでご飯を食べることがだれよりも好きだったことを思い出した。そしてそれは、毎日十分に食べるものもなく、明日の生死さえ分からないような状況を生きてきたからこそ、皆で楽しくご飯を食べられることこそが幸せだと感じていたのかもしれないと思う。

ただ、戦争をしてはいけないとか、平和が大事とか、口にするだけじゃ何も変わらない。戦争によって、多くの命が失われた事実を受けとめ、私たちに何が出来るのだろうか。一人の力は、小さく、弱いかもしれない。でも、一人ひとりが自分に出来ることを行動していかなければ、何も変わらない。

今の私たちの幸せは、先人たちの苦しみや、つらい経験があったからこそ成り立っている。戦争を経験していない私たちには、実体験を語ることも、苦しみを伝えることもできない。けれど、先人たちに感謝し、戦争の悲惨さについて後世に伝えていくこと、考えてもらうことは出来る。私は、改まって祖父から戦争について話をされたことはなかったが、それでも、戦争経験者の生の声を聞き、折りにふれて大切なことをたくさん教わってきた。だから今度は私が、日々を真摯に生き、この先も安心して平和な世界に暮らせるよう、次の世代へと平和のバトンをつないでいきたい。

大　賞

今の私にできること

藤山　彩乃（東京学芸大学附属小金井小学校　６年生）

「戦争なんて私には関係ない」
これは、戦争に対する私の第一印象でした。しかし、今思えば、この考えは浅はかだったと思います。平和な時代に生きる私にとって、戦争が身近なものに感じることができなかったために持った考えだったからです。昔とは違い、今は関係あると思うようになったきっかけはいくつかありますが、その中でも最大の要因は沖縄県にある、ひめゆりの塔・平和祈念資料館に行ったことです。ひめゆりの塔とは、沖縄戦で亡くなった女子学生、教員の慰霊碑のことです。そこに行って私が学んだことは、戦争の悲惨さや愚かさ、そして改めて何よりも命が一番大切だということです。平和祈念資料館の資料で一番心に残っているのは、体験者の証言の中にあった、
「私たちに何の疑念も抱かせず、むしろ積極的に戦場に向かわせたあの時代の教育の恐ろしさを忘れてはいません。」
という言葉です。当時は国のために戦うことは誇りであり、日本人としての務めでもあると教育されていたそうです。そのため、ひめゆり学徒隊の人達は病院に動員される時、何の抵抗もしなかったそうです。私はこのことを知った時、とてもおどろきました。確かに国を守ることは大切なことですが、それ以前に国民の命の方が大切なはずです。

この考えすら通用しなかった戦争。本当に悲しいことだったと痛感しました。

そして、もう一つ資料館に行って知ったことは、空爆された町の様子です。想像していた様子をはるかに超えるものだったため、私は信じられず言葉を失ってしまいました。雨あられのように降ってくる焼夷弾や逃げまどう人々、そして地面に倒れこむようにして亡くなっていく姿。今、私達の目の前がこような光景であったとしたら誰だって目を疑ってしまうと思います。

こんな状況にさせるほどの戦争を誰が望むというのでしょうか。

こうしている間にもまだ世界では争いが続いていて、多くの人が命を落と

しています。でも、国の問題は武力で解決するしか方法がないわけではありません。話し合いで解決できるはずです。

戦争とは、人間が犯す最大のあやまちなのです。ですが、このまま時間が経過して戦争体験者が少なくなっていけば、世界はまた同じあやまちをくり返してしまいます。もう二度と繰り返さないようにするためには、戦争体験者の貴重な体験談に耳をかたむけ、一人一人が良く考えることが必要です。そして、そこで知った戦争の恐ろしさを後世に伝えていくことが大切です。

それこそが、唯一の被爆国として今の私達にたくされたことであり、できることだと思います。

優秀賞

わたしのへいわ

金丸　桃子（小金井市立緑小学校　１年生）

へいわってなんだろう。よくわからなかったので「へいわってどんなこと？」という本をよみました。その本は、たくさんえもかいてあって、かみのいろ、かおのいろがちがう子どもたちがあそんでいました。みんなでいっしょにごはんをたべたり、あそんだりしていました。そしてわたしもかんがえてみました。ごはんをたべられること。ぐっすりねむれること。おふろにはいれること。おでかけできること。ともだちとあそべること。学校にいけること。これがへいわなのかな。まだまだよくわからないのでじしょでもしらべてみました。へいわとは、しずかでのどかであること。おだやかなこと。とかいてありました。むずかしいです。いまのわたしは、へいわなんだとおもいます。

「へいわ」のはんたいは「せんそう」といって、ばくだんがおちたりして、人がたくさんしんでしまうことだってパパとママにおしえてもらいました。せんそうとは、くにとくにがけんかをすることだそうです。

わたしのママはながさきうまれです。小さいときからへいわのことをたくさんべんきょうしていたそうです。学校でもへいわのしんぶんをつくったりほかの学校の人たちとこうりゅうかいというものをしていたそうです。へいわをかんがえることはとてもだいじだとママはいっています。わたしはなつ休みに、ながさきのげんばくしりょうかんとへいわきねんこうえんにいきました。わたしのひいおばあちゃんはながさきでげんばくにあいました。もうしんでしまいましたが、ママやおばあちゃんから、はなしをききました。げんばくがおとされたばしょのちかくにいたけど、たすかったそうです。でもいっしゅんで町がなくなったそうです。人もたくさんしんだそうです。げんばくはとてもこわいばくだんです。しりょうかんでみたものはぜんぶこわいとおもいました。かわいそうです。ママもわたしもかなしくなってなみだがでました。でもまたいってもっとべんきょうしたいです。わたしがすんでいる小金井市にもむかしばくだんがおちて、たくさんの人がなくなったそうで

す。へいわだったら、こわいおもいをする人もばくだんがおちることもありません。

なんで、くにがけんかをして、せんそうをするのか、わたしにはわかりません。わからないけど、もしわたしがまほうをつかえたらみんなのこころをいい人にします。おこったり、けんかしたりしないようにしてあげます。そしてまずじぶんができることで、おともだちとけんかをしないようにします。

パパとママが、いつもの日がずっとつづきますように、まい日こころの中でとなえること、へいわはだいじということをわすれない、ひいおばあちゃんのことをわすれないようにすることが、へいわをまもることだよとおしえてくれました。

そしてみんなでわらう。たくさんわらうことがへいわなんだとおもいます。

佳　作

私達がつくる平和

望月　清恵（小金井市立東中学校　１年生）

私は、平和というものは、人を傷つける「戦争」という恐ろしいものがなくならないと、つくれないんじゃないかと思います。

私は一時期、戦争をしないということが、必ず平和とつながるとは、思っていませんでした。なぜなら、日本はもう戦争をしないといっているなかで、いまだに多くの国が戦争をしています。多くの国で戦争がおこっている現在、いつその戦争にまきこまれるか分からないというのに、戦争をせずに人を守れるはずがない。何も抵抗できず、無念に死んでしまうにきまっていると思っていたからです。そんなことになるなら、戦争をすることによって、守れる命もあるんじゃないかと思っていました。

そんな私の考えが変ったのは、私の祖父が亡くなった時です。悲しくて悲しくてたまりませんでした。ですが、祖父とのお別れの時、祖父に触れることが出来たこと、最後まで見送れたことにとても感謝しました。そして、今考えて思ったこと。それは「戦争で大切な人を亡くした方の無念の気持ち」です。戦争で大切な人を亡くした方々は沢山います。その方達の一人一人が深い悲しみ、そして国への強い怒りをかかえていると思います。自分の大切な方が亡くなったことを知らされるだけで、ご遺体と対面することも出来ず、お別れをしなければならない。本当に悲しすぎると思いました。そして、戦争をすることによって守れる命などけしてないんだと思いました。

戦争がおこる理由は様々です。ですが、その戦争の原因となったもの、それは、戦争をしなくても解決したんじゃないか、それは、本当に戦争をしてまでも、多くの人の命がうばわれるというのに、それなのに戦争をして解決しないといけないものだったのか。私はそんな戦争は絶対ないと思います。だって、人の命よりも大切なものなんか、あるはずがないから。

この世界から、戦争がなくならないのは、どうしてなんだろう。私はいつも疑問に思っています。人の命の尊さを、しっかりと理解していないんじゃないかと思います。そして、「戦争をすることによって、お金をかせぐ人が

いる」との事実は、あまりにもおかしすぎると思います。そして、この世界から戦争がなくならない理由の一つには、「戦争をすると決めた人達は、たたかうことをしない」ということもあると思います。

戦争をすると決めた人は、無責任すぎると思います。「戦争をします」と伝えるだけでなにもしない、一般の方々を平気でまきこむ、「お国のため」と言えばいいとでも思っているのでしょうか。

戦争をなくすためにできること、やるべきこと、知るべきこと、それは、当たり前のことである、「人の命より大切なものはない」ということを、世界中の人が改めて感じることだと思います。人の命の尊さを一人一人が改めて感じることが出来れば、戦争なんておこるはずがないと思います。そして世界中の全ての人々に、大切な人がいて、自分を大切と思ってくれている人が必ずいるということも、改めて感じることが、大切なことだと思います。

戦争をなくすには、とても長く時間がかかると思います。ですが、必ず戦争のない世界をつくることはできると思います。これからの世界をつくっていく私達が、世界中の人々が、命の尊さを改めて感じることが出来るように、まず何をすべきか。これからは考えていこうと思います。そして、一人一人が、今の世界から目を背けずに、深く考えるべきだと思います。それが、平和な世界をつくるための大きな第一歩だと思います。

佳　作

戦争について思うこと

箱井　真理（小金井市立緑小学校　５年生）

去年の夏休み、私は戦争の夢をみました。前日に終戦記念日のテレビ番組を見たので、そのイメージが頭に残っていたのでしょう。たくさんの飛行機が、耳をつんざくような音をたてて飛び交い、たくさんのばくだんを落としてゆく中、私は必死に逃げまどい、家族とはぐれる夢でした。こわくてこわくて、私は起きてすぐに母の所に行きました。夢だったんだと、すぐに確認したかったからです。いつもと変わらない朝で、いつもと変わらない母がそこにいることにほっとして、私はすぐに母に夢の話をしました。ひとりでかかえきれないぐらいこわい夢で、私の心ぞうはまだどきどきがおさまらなかったので、母に聞いて欲しかったのです。母に話して、だんだん現実にもどってはきたけれど、なぜか私の心はザワザワとして、一日中落ちつきませんでした。つい、戦争が始まって、家族がバラバラになるんじゃないかと考えてしまうのです。父や兄が兵隊となり、母や姉は働かせられ、私だけそ開することになるんじゃないかと、いろいろと想像してしまうのです。そんなことを想像していると、こわくて悲しくてなみだが出てきてしまいました。母は私のなみだをふきながら、

「真理を一人にすることはないから大丈夫。」

となぐさめてくれたり、

「そんなわからない先のことを心配して悲しむより、今日や明日のことを考えなさい。」

と言ってくれました。私もその通りだと思ったのですが、やはりこわくて、心のもやが晴れなくて、私はたくさん母に質問をしました。

「戦争はすぐには起きない？」

「小金井市にはばくだんは落ちない？」

しつこいぐらい問いかける私に、母ははっきりきっぱりとした口調で、的確に答えつづけてくれて、だんだん私の心は落ち着いてきました。

私の心に特に深く残ったのは、

「この平和はいつまで続くの？」
という私の質問に答えてくれた母の言葉です。
「それはわからないけれど、今は私たち大人が戦争をさせないようにがんばるから、真理が大人になったら、今度は真理たちが戦争をさせないようにがんばるんだよ。」
その言葉を聞いて、私は大人になる前に戦争のことを少しでも知ろうと思いました。まずは、戦争の話を聞いたり、戦争の本をいくつか読んだりしようと思いました。

　あれから戦争に関する本をいくつか読みました。空しゅうについて、原ばくについて、ナチスのユダヤ人はく害について、絵本や物語や記録やまん画など、探せばたくさんの本がありました。戦争について知れば知るほど本当にこんなことが起きたなんて、すごくしょうげき的でした。小さな子供も年よりも、ようしゃなく殺してしまう戦争って、いったい何のためにあるのだろうと思います。死んだ人も生き残った人も、つらく苦しい思いをします。負けた国の人は不幸だし、勝った国の人だって、うれしいのは戦争が終わったということで、決して幸せではないと思います。戦争を体験した人はみんな、二度と戦争をしてはいけないと言うのに、なぜ戦争はなくならないのでしょうか。戦争について知ることは、つらい内容ばかりなので、苦しくなることもあります。でも私は、戦争をさせないために、これからもたくさん戦争のことを知って、大人になったらしっかり自分の意見を言えるようになりたいと思っています。絶対戦争をさせないようにがんばります。今は、毎日、戦争が起こらないように祈っています。

佳　作

未来につなぐ道しるべ

工藤　友奈（小金井市立前原小学校　５年生）

あなたにとっての「平和」とは、どこにあるものですか？私は、日常にあると思います。毎日一人一人の時間がそれぞれ何か感じているはずです。「楽しい」「不安」などの気持ちです。私は、つらいこと・悲しいことがあっても後から幸せはおとずれてくるものだと考えています。平和があたりまえになってきている日本ではなぜ他の国で戦争がおこってしまうのかふしぎに思います。

例えば、三人でケーキを分ける場合、上手に分けることができたら問題ないと思いますが、一人一人の大きさがちがってしまうと、おこって言い合いになることやケーキが小さくても我慢する人だっているでしょう。どちらもあたりまえのような感情ですがそこからが大切です。三人でどう話し合うかによって気持ちの良いケーキの分け方をすることができるのです。うまく話し合えればまるくおさまることができます。しかし、三人で上手に話し合うことができないと、けんかが起きてしまいます。これが国と国とのけんかになってしまうと「戦争」になってしまうかもしれません。平等にするのがけんか（戦争）が起こらないきっかけとなってくるのだと思います。なので、世界中の人たちが平和になりたいという気持ちが大切なのだと考えました。不満がある人たちと「話し合う」ことが戦争を止めることにつながると思います。このように平和は、相手、そして自分の気持ちを大切にするとできるものなのです。

私は、だんだん昔、日本がやった戦争があって良かったと思ってきています。この、戦争があったからこそいろいろなことを学べ、自分のこと以外の相手のことを考えることができたのだと感じます。日本がやった戦争は、今いる日本の人たちを、そして、これから生まれてくる人たちを助けてくれているのです。なぜなら、あの戦争以来、一度も戦争をやっていないからです。だから、この戦争は日本の良い道しるべとなっていると考えてくるようになりました。日本と同じように全ての国が平和になれば、安全な毎日をおくれ

ると思います。そのため、日本は「平和国」として世界に平和を伝え続ける国でいきたいです。

日本人全員、平和が日常的になっています。でも、平和の大切さや幸せという本当の喜びに感謝することが昔の人より少なくなってきていると思います。もしも、いきなり「戦争をするので準備してください。」と、いわれたらどうしますか？　私はもちろん、絶対にやりません。中には、戦争を始めようとする人がいるかもしれませんが、ほとんどの人が、戦争をやりたくないと思っています。もしも、戦争が起こったら、大混乱して大変なことになってしまうのが、目に見えてうかびます。平和が続いても、必ず戦争について昔のことを知るべきなのだと考えています。戦争のことを知って、体験した人の思いを知ったり、本を読んだりして、その戦争をする苦しさや悲しみを知ることで、命の大切さなどがここでやっと分かるのだと思います。

残念なことに、争って初めてこのすばらしい平和に気づくことができたのです。世界の国が支え合って平和というものができます。昔の戦争があったからこそ、今の私たち、日本があるのだということが分かります。戦争を体験した人の背中を見て、私たちのための道しるべになるのだということを、昔の人たちが教えてくれているのです。

私たちも、みんなで支え合いながら、前へ前へ進んでいこうと思います！そして、平和が何か？ということ、戦争のつらさやこわさを知って、平和のありがたさを未来につなげていこうと思いました。

平和作文集

発　行　平成２９年３月５日
　　小金井市

編　集　小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
　　小金井市本町六丁目６番３号
　　☎０４２－３８７－９８１８

再生紙を使用しています。